

富士市のギネス  
**たんざく No.1**  
**日本一の浮島ヶ原の植生**



サワトラノオの花

浮島ヶ原には全国的にみてもまれな植生が幾つか見られます。

これから初夏にかけて生い茂るヨシの陰には、白い5ミリぐらいの小花を穂のようにつけたサワトラノオを見ることができます。サワトラノオの群生地は国内に数えるほどしかなく、県内では唯一浮島ヶ原に群生しています。

また、ナヨナヨワスレナグサは昭和47年に初めて命名された植物で、茎が細く、ヨシにもたれるようにして成長します。そのほかにも自生の南限となるオニナルコスゲなど珍しい植生が多く、日本一の植生といえます。

市は、この貴重な浮島ヶ原の自然を保全し、親しめるように今年度から5ヵ年計画で、公園化を進めています。



中央公園の主、大ケヤキ

二百歳の大ケヤキ  
**天間から中央公園へ**

中央公園の整備中の広場に、主のように居座っているケヤキがあります。高さは約二十メートル、幹の周囲は約二・四メートルもあり、樹齢二百年ぐらいい言われています。

実はこのケヤキ、昨年の六月まで天間北にありました。ところが、開発により切られることになったため、移植されました。何しろ、お年寄りの木ですからついたかどうか心配されましたが、この春多くの若葉をつけ、新天地に根をはりました。



いちご 花崎一三さん

イチゴのボランティア  
**五味島の花崎さん**

五月十三日、五味島の花崎一三さんのイチゴハウスで、障害者の皆さんなどを招いて「いちごをいっばい食べる会」が開かれます。

これは、花崎さんの善意と山川工業青年婦人部の皆さんなどの協力で行われるもので、ことしが八回目。甘いイチゴがたくさん食べられるとあって、昨年は百人ぐらいの皆さんがイチゴ狩りを楽しましました。花崎さんは、「ことしは数がならないので、ちよつと心配でも、味はいいよ」と太鼓判。

広見の山岡よし子さん  
**陶芸で入選**

広見町六の山岡よし子さん（六十三歳）は、社会福祉センター広見荘の借築窯で陶芸を習い始めて五年、このたび新槐樹社の展覧会で、見事入選を果たしました。受賞作品は一抱えほどの大きさの花器。表面には曲線模様が丹念に描かれています。「陶芸は創造力と根気。制作中は、我を忘れて無心になります」と魅力を語ります。夫の義雄さんは、同じ陶芸教室の熱心な指導員。受賞作の焼きを担当しました。二人三脚で、ますます磨きがかかる山岡さんです。



受賞作品を手に山岡さん



**広報紙で街びん**

吉永公民館広報部の皆さん

「広報ふじの上をいく広報紙が吉永地区にあるよ」という話を伝え聞き、たどり着いた先は「広報よしなが」編集部。今回は、半ばライバル心をむき出しにして吉永公民館広報部の皆さんにおじやました。

「広報よしなが」はタブロイド判の大きさで、2〜4ページ。年三回発行され、吉永地区全戸に配布され、二千八百部印刷されています。名前の通り吉永地区の広報紙ですから地域の話題がくまなく載っており、「地域の話題をもっと載せたい」と悩んでいる我が編集部からみれば、うらやましい限り。もともとは、「吉永公民館だよ」と一緒に街の話題版という形で出していました。が、昨年からイメージを一新。公民館だよりから独立して「広報よしなが」の誕生となりました。

編集に当たっては、東図書館利用者の常連を中心に口コミで地区のハリキリウーマン七人が集まりました。とは言っても皆さんごく普通の主婦。初めは全く手さぐりの状態からスタートしました。ですから、「とにかく発行しよう」を合い言葉にがんばり、これまで二号を発行しています。



左から公民館の堀内さん、鈴木編集長、羽田さん、高橋さん、高橋さん

編集長の鈴木麗子さんは、「話題探しをしていると地元を再発見でき、自分の勉強になります。地道な催しにスポットを当てることで微力ながらも地域文化に貢献できれば」と語ります。編集部は吉永公民館を会場に毎週水曜日。現在、五月末に第三号の発行を目指して、ねじり鉢巻きで奮闘中です。